古文讀本

四の巻

特40
150

古文讀本四の巻

大和田建樹 選

○翁草（枕の草紙）

清少納言

清原元輔のむすめにて。一條天皇の后宮に仕へたまる官女なり。見る事聞くこと。おもふ事につけて。業のまゝにまるをを。枕草紙といふ。

うゝふちぶらふ　ねゝはぶらふ　たまゝて。

古文讀本四の巻

大和田建樹 選

○翁まろ（枕の草紙）

清少納言

清原元輔のむすめにて。一條天皇の后宮に仕へまゐる官女なり。見る事聞くこと思ふまゝにつゞて業のまゝにまゐるをを。枕草紙といふ。

うゝふちぶゝ　うゝふちぶゝ　わらはかゝふたまゝりて。

命婦のおもやとていやもをのしけまばかしづの
きうまふごはしふ出でたるをめもとのうまろ
命婦おもまちなやいりぬまつとよぶにきので。
日もさしあがりたるにうちひゞふりてゐる城。
おごりとて簾まろいづる命婦のおもやくつど
いふにまとくかうてちまもはしまのうた
きばおびえまぶしてみひのうちたいりぬあち
ごしひのまたうつをおはしまんちらんごてい
みじおごうをうまゐ猫ハちふとおるよい
れをゐいてをのうとめせぐ茲人たぐたの

まゐうたうに此簾まうちちかぢて犬嶋うつ
うはをたぐいまぐおかきうれだおつまうて
かまちとぐうはもも命婦とさいちみてめもとか
へてん。いとうしろめて。おかきうれだの
しこはうて法前ふを出でびいぬまうう出で。
瀧ハちぐちておひつのはつあはをいみぐく
ゆうもおあれつうをもを三月三日ふ頭辨柳の
うづをせをを。の花かぎよちを。ちく
うちふさせちぐてはまの世ゐひをう。
かうめ見んとはおもひのけんや。あうき

ぎるぬ。おもはずもそういうなるべむのひ候ふなり。
うぐちくさうもあれちるぐいひて。三日四日よる
ぬ。ゐるつうさ犬のいみどくちくらるのすれ
ば。なふぞの犬のうくひきくちくにのわん。
とちくにより。ぐいの犬ごとはまちもぐ。ぐ
ひよゆきみのちやどちるものはまちて。あ
ちいみど。犬を藏人二人してうちゐひきぬべし。
ちるぐきせゐひらるがかへるわたるこて。行
ぐたまふといふ。心うれたやゐ。籠まるちるたぐ
さうちひふちちるうつといへば。きいにやる

ほどにうらうぢてるれやこぬちにくれば門の
ちうにひきすてるつといへぐ。おそれぐなぐ
るタつうるいみどぐにそれあちまーげちる犬
れるびぐれるぐわなすれおるけば。あはきま
ろうかるる犬やハいのぐろハ見ゆるちぐいふ
ゐ籠まるとよぐ耳ふもゆきいまびそれぐとい
ひわびこいひくちぐナきバ。右近ぐ見ちう
ゐるよぐゐてちもれをまぐとれちぐて
めせぐまわるたこれハ籠まるちと見せをを
ゐまるに似て伺まぐむこれハゆーーげふこう

ゐるめり。まこと蓋まろとよべどよろこびてまう
でくるもみをよべどようこびおらぬるめり。そ
れをうちうちてすてゐるぬどうちゆーつき。
ゐるをもどもに二人してうんうんまるまるもんん
やゆきば。心うがらせゐぷぷちうちて拍く
をせうれどくはるばのらぬもふいひちて
やみぬるつとめてぜげづぐーにまるゐて
うづまるうてゐるみもをてゐうんずれば。
さぶらふよ犬のはうらもにゐいるをを。
あそれきのふ蓋まるをいみぐおちうれち。

ふんさうかちうれ何の身にうのけたびハな
まるんいうにまびきうちをんどうち
いふどに此ねるる犬ぷひまるきてちみ
ぶ我ぬぶれゐまおとんいかまるまざはこ
き蓋まふうあるけをよべをかれのび
てあれうんどこのをれまてをかきとか
ぎれ。ゐぶのみををうおきてゐハ蓋まろ
といふぷまうていみぐくちく。ゐ前まも
ちまうハせゐぷ入まるのまうて右辺の
内ゐめてかくちぐおうをうれバどうひの

みたちの殿へにをたてまつりてわたりをはしまして。なをまゐ。犬ちぼをかゝるきゝてゐる物をりけうとぞわゝはをたふ。への女房たちちぐとさゝにまゐりあつまりてよづにをいまぞたちらぐぐぞ。ちぐ顔ちぐきれたぐ。ぞれてゝぜさをぞ。といへば。ついよいひあゝはゝてゝる。ちぐぞわゝをせたまゐりだぐたちをてゝたばん和のゝようぞまゝにや侍らん。のき見侍らんぞいひゝれば。あのれゆゝしぐぞるもれちぐぞいきんきばさゝとをつひよ見つくるをゝむ侍らんさのゝえかゝくさせゐまゐすぐ。といふゐぐぞちてのちぐ。ゝとゝかゝぐゆゝ侍まて。もゐのやゝにちゝにさぞなをまあはまをぐゝれてぞふゝひゝをれ出でゐゝほぐゝをぞにきゝびをかゝくあはまをれゝか。人々にゝをいきれてちれちぐん。

かゝぐぐ　叙位

命婦　女房の五位にちゝたゝもれをいふ

義まゝ　犬の名

あさがきひのま　天皇朝餐きこしめす間

はけづぐ　御髪あげ

大盤所　女官の詰所

○雪の山（同じく）

十二月の十日餘のかぎり、雪いとたうふかりたるを。女房どもなどして。もの、ふたいれつゝいとおかしくおもしろし。おちばどもを庭にはきあつめたる山をつくらせたまへり。ちぶひめ、てをかせ事にていへど。あつまりてはきたるに。殿守司の人にく侍きとめにまゐりたるぞ。これよりて

いとらかくつくられし。宮づかへのちちぶまゐりあつまりてさとくはへ。さとにつくれだ。ねの衆三四人。まゐりたる殿守づかへの人と。二十人ばかりにて。里ちるちぶひめにつかはしたまへば。山つくる人にまゐりたまへば。雪山にまゐりぶん人ふるおちばうず。とゞめんとぞいへば。聞き付けたるまゝにまゐるもあり。里とおきえつげやらべつくりてつきぬ。宮づかへ。きぬこゆいとらせて。樣になげ出づる。つぼうによりてをが

みつ〻ゝに作りてみるまゝのでぬ。うつのきぬなぶきさるる。のゝへ作らで特衣ふてぐなる。れいつまでおうれんと。人〻のゝまはしふ。十日あまうハあうちんだぐ山ごろのぐご城あるうぢ〻ゝやきぱい。うたとゝはをゆまゝで。五月の十五日までさぶ〻ひちんとゝすを。作前すとえさハあゝ。ごおぐひえう。女房ちぐハすぐゝ。年の内つぐうまでゝあゝ。どのゝゝやひえ。あまはごふくゝやゝゝれげふえゝと作ハあらぐゝん。ついあちちぐゝやんべうけるこ。志

ゆたるをおもへぐ。作ぐれ。さまでなくを。いひそめてんさゝハとてかたゝあゝがひつ。廿日のほど丁雨ちぐふれど。きゆべゝちゝたけよひゝゝおゝうもてゆく。ちゝ山の観音ゝれきやきそまゝふちをいのるを。物ぐゝ月。さてそれ山つくまたる式部の丞ゝぐたゝの。使ふてまあうたれぐ。志とねち作ぐ。物ちぐいふにひふの雪山つくゝをたまはぬ所ちんなき。作前のつぼふをけゝゝせ作つう東宮弘徽殿ふもつくゝをそまへう。京極殿ふもつくゝをたまへう。ちぐいへぐ。

いとにのこめづらしき雪の山
とりるべくはよりにしるこのれ
とかくはしられる人ていちはきばたびくう
たぶれて。返ーハえたのみまつりふぐちぐあざ
れるうみのまくふく人にをかりたらんと
くたちふき。歌ハいみづくきのむかきくしにあ
やしぎ前ふきけりいめてみづくよくくとぞた
もいつくん。とぐのうのまハしる。（中略）雪山ハつれ
ちくてらしをこのうぬ。ついたちの日又雪ちか
くふたらをふくくとふつこるのれと

ちふふこうれハあいちる。はづめをばおれて。
今のをばのれすてよと作せらるうまてつぼよ
へいかとうおるまばきぶくひのをちちるもれ。
ゆりはのざくれるとれねぎぬの袖のうて。
あをれうみの杉につけるをおきてわちれ
出でうそいづこのぐと問へで齋院ようと
いふたふめでくおぼえてうて手ぬま
だおふとぐうたまばをやにあうたるみ
うしをおちふんちぐかきよをてひとうね
んであくいとおもかうつのれきばひ

しめくに。おごろのを引て。れぶさはいるこの
たまはすんまバ。齋院より院文のいりんにをゝの
でゝいろぎあけ侍らざんと。アいるよげふいふと
かゝけゝ。さておさらを引て。後文あけさをゐ
まへまバ。ゐすぎかゝれる卯槌二つを卯杖のさ
きたうらつゝみちぶて。山ゐちバちゐ。ひゝげ。山
すげちぶゝうつくしげよかざゝて侍文ハちゐ。た
ぶさるやゝあゝんやハ。さて侍らんずれバ。卯槌
のかゝらつゝみゐるちい侍さ紙て。
山さゝゐむをゝひぶちを引めれバ

欠

MISSING

雪ぬ山ハ。まつゝゐ越のふやあらんを見えてき
えげもれ。くらくゝて。見るかひもなきさま
ぞ。ちる。勝ちぬるちゝてい。うで十五日ま
ちつけさきん。とわんぎんで。七日をゞたえすぐ
さゞと猶いへゞ。いうでさを見はてんとゞうれ人
思ふゞ。ゞ。俄ふ三日うちゝいらをあまつゞし。
いみゞらくもちをゝく。出山のはてをちらびちら
ちん事とまめ中のにおもふほゞる。人もげよゆ
うかゝつるもれを。ちゞいふ。ぱまへにもおか
をゝる。おちゞくそいひあてゝ。ぱらんぜさせん

とおもへらうひちるれば。皆物の具ちらびいみ
じくきわづきあはきてたもちといふもの
のついぢれうごに云さ作りてねるを。様の
もをちらくよびよきて。此雪の山いみじくまと
まてわらはべちおごふふことちらさせらぼるさを。
十又日まで作ぶらせよくくまもりて其日
にあらばめでれろくたまはきんとんぷる
くにをいみじきよろこびいはんちぐかるら
ひてつゆにだいばん所の人げはちぐにおひて。
くるくるぶ抱やちにやとゆやおほくとらを

きばうちあるゆやはきとたりかはまも
ま作らんぷらはぐちぐぞのぐら作らんといへ
ぐそれを甘いしてちのぐらんもれをたのよ
しをやせちぐいひきのきて。いらをるまひぬれ
ぐ。七日まできぶらひて出でぬ。其ごとさまぐの
うしろめれもれまに。ちらやけ人すはを作ら
ちぐりたえびいまめにやう。七日の作節供
のおろれどもをやりたきば。をぐこつるまちぐ
うりてはわらひあへう。里ふてとなるすれ
ちちたきを大事にて見せるやる。十日のぐご

にハ五六尺ばかりのまたなりといへば。うれしくおも
ふる。十三日の夜。雨いとゞしくふきぞ。れみぐさ
えぬるんと。いみじくくちをし。今一日もまちつ
るてゞやよろこおもねてなげゝば。ちく人も物ぐ
るほしゝとまちゝ。人もおきてゆくゝ。やゞておき
るてげきおこしたるにさゝにおきよバ。よくゝみ
ちゝだゝれて。おきいでゝをやりて見ればバ。
まゝふだばうにちりて侍る。さいもちいやう
ゝ。まゝはべもとせでまもりてあひあちてよ
でもきぶゝひぬべゝ。ちくたまいゝんとやすと

いへゞ。いみじくうれしく。いつゝうあひよちち
ばいやとゝう歌よゝて。物よ入れてまゐるをんと
思ふと。いと心もとなくわびちゝ。まゞゝちなる
ものきれるをうびつちるゞゞたせてさいきよきちち
うゝん。ちいひゝもいきてもてこちゝちげちゝ
んハかきすてゝ。ちゞいひくゝめてやりたれバ。
いやゝく。もゝせてやりつる物ひきちげてそや
う失せ侍ゝにゝ。といふよ。なきます。をの
ゝゝいでゝ。人も語りつゝへ侍をんとう
めゞずんゞつるうゝと。いとあきまゝく。のひを

く。いうにたゝぬ。きのふ。ちぼうなりけん和歌。我のほゞゑまれえぬらん事といひくんびきゞ。ゆゝもりゞやーつふ。きのふ。いゝやくくるまで待ちたゝ。ろくをたまはらんと思ひつる物をたまはらびちりぬる事と手をうちてやー待すれるといひさぐに内よりおかせ事なりて。さて雪はふまでであつやとのゝまゝをれば。ゝゝやわくくちをしれど年ぞもついきちまでだふあゝど。人くけいーゝ弱ひー。きのふのタぐれまで待りーをいやうりーとちんた

もひ弱ふる。けふまでるあまり此事にちん。夜のほゞに人ぞにくゞてとりて待るふやとるん切ちあり待る。けいせ作をあまんやをきこえさせつ。さて二十日にまゐりたるをまづ此事を出前ふてといふ。皆ちえ行とてふれうだきひちさゞてとてちつる。帽子のやうふてすれちまうでちゝ待ちゞ。ちのさまーかりー事。ちゝふたゝ小山ら作くうつくて。白き紙ようゝいみゞくうちてまゐちきんとぞ。そこゝやちゞけいすれば。いみゞくわゝいせ作ふ。おま

へちる人くをわらふ。かう心ていきておもひ
くくゝゝゝゝををゝのへあきば。罪うらんぞまくにそ。
四日の夕ちうさぐらひどもやりてとうひて
をゝぞのへゝぐとくよいひあてたゝしおそをのし
うゝしう。それ暮いできていみどう手をひゝて
いひくれぞおいを奉ぐかれようきてゝん人よ
のうちのいちさゝうば蛭うちおぐをんぞいひ
て左近のつの内南のついぢれとたゝれとうす
てゝいとたのくくておくくちんあゝつる。といふ
ちうちのばげふ二十日までをまちつゝてよう

きびくたゝとゝ初ゆれまもうそひちまう。
つみをちくゝ名てゝいくおもひようがくあ
らぐひたゝと。殿上人ちどにをおほをゝれたう。
ゝゝかの歌をかゝれいまハうくいひあゝは
ゝつれぞおなぐことかゝゝう。うれちぐはま
ゝみをのゝまハをき人くものまぐちにきん
にう。ちばかゝのおをうけあまうちぐうけ
いゝちんちぐまめやのにうく。ふうぐれば。う
へもわくくをひひてまおとに年ごろハおうく
の人ちめゝを見つゝをうれるぐあやくおも

ひ〜ちぐおほをしくるるに。ぷやぐ〜〜くうぢも
なおぬべた心ちぞしける。いぐあいきいみぢき世
の中ぞの。おもちるふうけくたり雪をうれ〜
とおもひ〜をうしれいあいちるてかお捨てよ。
ちぐこうおかせぐぬ伝しうぷやせぐだるこ
せぐとおぼ〜くるれんこうへをうちはせお
はまん。

越の　越ハ越前越中越後地方をさん　の文字の下の

うちふご　菓にてつれる　おもに

略語に注意すべ〜

こうもり　木守にて庭守に同

ますま　をさめ

賤〜き女の役

をうびつ　食物などを入る箱

くんずる　屈する

おもひ煩ふる　用法に注意

まで〜

○宮ぢ御琵琶（同じく）

うへの御づぐのこうしのまへにて。殿上人日ひ
とひとりとうえうきあそびくうて。まかでわの

うゝほゞをかゝ球まゐらぬふ。なほをれば
らをけ一出でたまゝぶ。戸あけるゞかゝはち
れぞ。琵琶の皮ゝをたゞぶまゝ上をたまへ
ま。くれちゐれこゝぞのいゐをよれつひちゐ。ち
き。又はゝゐもあまきゝて。いゝくゝくつや
やゐれる皮琵琶に。皮ゝれ袖をゝちのけてこゝ
へ皮をたまゝ。めでゝれよ。そばゝゐ皮ひゝひ
乃ゐゞきゝくけゞやゐにて。ゐゞゝに入えさせ
結へゝるゝたゝゝべもゝれゝゝれくめでゝ。ちゝく
ゐ弱へる人に皮一ゝゐゝたゝけ

んをえゝハあゝゞ皮けんゝ。それハゐゞ人
にゝゐあゝゐめゞくいゐをゝて。ゝゝちれきを。
ゝゝゐくわゝいゝてけいすしバ。ゝゝハを弱ひ
て。わきハきゝたゝゝやゝ。ゝれんゐゐきゝゝゝ。
たゝゝをゝの。

おゐゝちゞゝ　大服油

なゝのばゝくゝたゝゝん

白居易の琵琶行の詩より猶抱琵琶半遮面

まて燈火をゝ

みゞ　伴衣

○卯花車（同じく）

五月雨さつきあめ。職にはかまんよぬ。
だめはまへふたまれる石をおとるもつらいも
ゆれバ。きいざまちるぬもの。ついきもの
雨ぐもふて。ぐもりくんづきぐちるを。時る
の者尋ねあるかぐや。いをおてどれもく
と出でるが。加茂のちるふ。ちたにぐとうや。セタ
のわるる橋ふをあるでよくき名ぐおるえそ

のるるにちん日ざとにちくと。人のいぐそ。
きハ日ぐるちるとい。ふる人もあるそこへ
とて。ゐ日のあるた。みやづう。ち車おるといて。
北の陣よりぢぐ。ちれをとぐ。ちれ畑ぐとて。ち
るをて。四人ぐかるぐのるてゆく。ちやま
ぐるて。いまる一つちるて。れちるぐくは。ちるぐいへぐ。い
あるとちふをるるきびぎもいきびちるさけちるき
ちまにて行くたぐまばいるの所ゐて人ゐるく
さわぐぢふにぐといるぐとくへぐでりぐひにて
まゆゐ射るれるぢ。ちばるちんぐておはまを。

さて車とゞめて。右近の中将うれ着き給へる。
といへゞ。ぢる人も見えず。六位ちゞみてもちまま
よへば。ゆう〜かくぬさとぞ。やくすぎよくて。
ゆきとてゆけど。道もまけるのうちもひ出で
られてをの。かく〜いふ。はおきのづの朝臣
いへあり。そこもやどて見んといひて。車よをて
ちりぬ。田舎ぶもち事そだて。馬のうるはしる
うど。網代屏風。みくるのすゞれちゞ。ぢたに
むの乃事をうついでたり。屋のきまもはの
ちゞもてぱちのくあきはちるれどをのれ

ろ。げのぞかゞよりやを思ふだかりろ。れきあひ
たる時るのこゝをもをくちをくゝ片前よをくめ
さび。ぢかくちるひつる人こにをあどゆふ。
ゐふつけてハかくる事をちんこくるべきとて。稲
といふもれおほくゝやいで。ゐのれ如どれ
きこれげちるぬ。其わくれ家のむひめをんち
なぢひれぬてれて。ゐ古人くてさうを見もちく
ぬ繰るべちものふくちてひのせて。歌うこは
せちゞくるをめ。げくくてわくて。時鳥のう
たよまんちゞちりるゐひまぬゞ。唐画よある

やうなるうけぐんなぞ。物くはせてる銭。見いる人なれば。歌あるべいやわろくひちびたり。のるもよきぬる人をぞうきをびをちるほもるぞをめいだしてもそまゐるべけき。むげよかくては其人なるべいたるぞいひてそうはやーぱ下ゐゐびをてぼのうつけるなどいへぞいりで女官なぞみやにつひをそへあんなるぞいへぞやりれろーてきいのはひぶーにちくハをしまつるれまゐへちれば。そてとうおろ。まうれひちぐほどよ。雨ふりぬぐーといへば。

いうぼく車にのるぞさてきの歌ハこうふてこそよまめといへば。ちぎれうちにくもれぞいひて。卯の花いみじくさきぬるを折すつくるまのすぶ。そでちるにたるぐ枝をふちきーたきば。たぐ卯の花がさるきにうけたるやうぶ見えけるぞとちるものきどもいみじーわろひつ。網代をちへにきうがちつ。うまぐくとちあつむるう。人をあはちんごおもつよ。ちらたやーた法師。おやーのいふうひちもものみみ。ゆまちくのーー見ゆる。ぞくちをーちかくきぬ

きバさうともいふやかうてやまんやハ。牛車のち
まをだふ人まつらせておうやまめ。そて。一條
殿のをかくるとぐめて。侍従殿やれはまん。時鳥
のこゑきていまれんゝ。侍るといちせた
るつのひだぐ。今ゆるぬ。あぐの君あぐ君とれんの
さまつる。ちぐひよ。聞ひろぐて。ちぬきたて
まけつつ。をいふに。待つべきにもあらびとて。ぱ
らをて。土御門ざまへやらるていつれまて
うちぐぐちのうんおびハ。道のまゝゆひて
ちばくとおひくる。ともにさぐひ。雑色もの

はうでは。るめくやれどいとぐいそが
くて。土御門よ来つきぬるにぞ。あへぎまぐひて
おはうまぐ。はくまれさまをいみどくうち
ひ孫ふつて。乃くの乗ものとちんぢに見
えぬ。猶おりて見よれどわひ孫へぐ。ともちう
る人ども興じうふ歌ハ。ゆのにうそれき
うんとみたまへぐいまおまへ。ちんぎさせ
ておうハちぐいふほどに。雨まうとまふぬる
どのおとは門のやうにあうで。此古法門しもう
へもくうそめけんとぐふういとふく

いかで帰らんずらん。こなたざまは
たゞおくれじと思ひつるに。人めもしらず
はしられつるを。おく。いかんこそいとすさまじ
けれとのたまへば。いざたまへかし。内へ。などい
ふ。ゑぼうしにてはいかでか。とりにやり
給へかしなどいふに。まめやかにふれば。傘なきをの
こども。たゞひきにひきいれつ。一條より傘をも
てきたるをさゝせて。うち見かへりうちかへり
こたみはゆる／＼と物うげにて。卯の花ばか
りをとりておはするもをかし。

みさうじ　御精進なりと云ふ
五九月に一ケ月づつ精進する
風俗ありしなり

職　中宮職をいふ讀方に注意
すべし

七月の云云　何々島の名の
つきたる橋ありしなり

てつがひ　弓射ることなり

だいばん　食事する臺

女官　讀方に注意すべし

はひぶし　身を自由にもつる

さぶらひに間ひろげて　さぶらひはさぶらひの間を
いふ

○それ二（同ドく）

さてまゐりたまへば。あるじもまれど向はをとゝまる。
うちみつる人〳〵るまで心うごかしもぐ。藤侍從。一
條の大路はまつるほど語るにぐ。こゝろふかく
ぬるぬちて。いぢらうたをこゝろをゝかる。
とけいきまばぬちをしの事や。うへ人ちぐのき
うに。いのぐのをかしきちてあらん。甚さ
つゝふふてふとこゝろよもしの。あまりぎ
たまちめたちんぐあやしきやうてもよめ。

いふうちる。ぬぐみまハひまぐ。げふと思ふ
ふゝわぐきをいひあをせちぐけるほぐに。
藤侍從のあつる卯の花をつけて。卯の花のゝ
けやゝに。

ほやゝぎすちくのたづねよ君ゆゑ
きゝのぐゝちをそゝをちてまし

うつまつゝんちぐぐぼへちぐまとうや
れバたぐゝれちてくいゝてぐけるものふ
たに紙ちぐいまてたまハをれバ。宰相のさゝ
うちれぬぐいをちをちゝにちぐいふゝぐ。

うちくくに雨ふりて。神をおがろくくちろ
ゐれば。物もねがひえぬ。ぬぶねうにねろに。職の
侍曹司にさてやみをぐみのうしにまゐりわ
まごひかやる。歌のうへぐやとりまゐぬ。ゆ
をひさくくりてひとりやむほどをくくくち
ゐぬ。ぬぶ今ちかろそれ侍る事をあらんとてさろか
うるかぐふ。人ら上達部ちぐ。神の事ヤしにまゐ
ゐたまひつまば。西ねをてに出でもれちぐきと
ゆるほどにまおまぬ。人をぐ。ちてえぐらん人
くくちめ。てやらぬ。大うるけちるいくを

ちるれ日ちろ。どくじて。ゆまそいいのでちれくいれた
ゐりしくぐに。人にねるのをで。ちぐでるくをい
まもれどそれいきたくし人どもれいをぢらん。
きれどとちをでとおもにくろあくめや。ねー
ぐにねぼめちゆをの。さしどいま
ををちまくくりにて侍るちくとやひすきは
しゐるでねくかをれぐれまハをくうばや
くにき。二日ばくうあくてその日の事れどいひ
出づくた。宰相のきこいのにぐ手づくうをする
ゐをいひ下ゐくびぐのたまゐをきのきる

まうて。おもひ出づる事のはまよふ。ふでハを
ゐまひて紙のちりたるなし。

ちさわらびこゝろひうたれ
ちかうを猶ひて本いへ事おほくなるむかしの
し。

ほとゝぎすまつて聞き給ふとも
ちかききてまちわびぬれバ。いみじうけぢかうた
ゐや。かくまでだふいのて時鳥のこゑをうけつ
らんと。わかは猶をもはづかしげなり。何か。こ
みゆくすべてよき侍らず。これんおもひ侍る物
を。もみぢをうなかり人のよみ侍るふとぞ。すめれど
おふさうろれバ。え侍ぶらふまじ。其心ちれん志
侍る。ひとのでかゝる。文字のかびしらず。春ハ冬のう
めをよみ。秋ハ春のをよみ。梅のをりハきくなぞ
をよむこそハ侍らん。されどうたよむといたれ
侍らしすぢハ。ひとゝ人にまちりて其をう
のうたハこれらありけまたほるいへど。それが
子ちれバ。ちかいはれぬらんこそ。かひあるさう
ちし侍らめ。侍ゆそりわきたるうつれくて。さ
ひろがにうらが。かまじく。我ハとおもへるさまにぞ

いそによみ出ぐはせんちゑ人のためいとゞ
しく侍るものまめやかにいすれぞわらはを
たまひて侍るばたゞ心にまかせよとのたまを
もいはで。やみぬるまハすれぞ。いかゞ心やすくちり
侍らぬ。今ハ歌のこゝろ思ひうけ侍るべきいひ
てあるこゝろ。庚申せさせたまひて。内大臣殿いみ
じく心まゝけせさせ給へ。ゆくさき更くるほど
に。題出ぐして女房に歌よませ給へ。みるけし
きだちゆるぎ出だけよ。宮の侍まつり迎へ侍
ぶらひて。掛りいしれぐさと事をのこいふを。お

とぶ侍らんしてなどのうるさよ侍ではちれる
たる。題をれとのゝをけるこゝろをけゆまを
まて。弦よむまぐくれりて侍まば。思ひうけ侍ら
ば。こゝやうれる事。まことにさる事やハ侍る。な
どゝはゆるせたまふ。いとこなるまぐれ事れ。
よりぬと時をもちゝびこゝろひハよめちぐせめさ
せ給へぐ。けぎよくきをいまで侍ぶらふ。こ
ゝや人どもよみいぐぶてよ。この侍ちぐ侍ぐめら
るゝこゝぶ。いさゝかちる侍ぐ文をこもて給ハせ
たゝ。あけて見まぐば。

え輔ゞ仮といはそきさきをや
こゝろしのうたふちづきてハをる
とあるをこゝふぬちをりれ事ぞたぐひちれやい
みじく笑へぞ。何事ぞ〳〵とれとぐものをまよ。
それ人の仮といくそれぬ多ちうせば
おもしのうこさハまげぞよまゝ
つむこゝ作ふらハびを。千歌ちうそむこれよ
すぞ出でまうでおやいまゝ。どけいしつ。ぬこのこゝぐ。
きんだちう〳〵人ちぐど。作まゝに人ちゝくぬちぐち
へぞ。ひさゝの柱ふとようこうまて。女房と物語し

てゐるに。抱をちげ作とせうる。あけて入きバ。
思ふべゝやいちゐ。第一ちうびをいうぶわ。とそ
せ作へう。作前まて物語ちぐひるついでにもず
ぐて人にそ一におちをちれびハ。更に何ふらせん。只
いみじうにくまれあらせられてあらん。二三
まてゐ死ぬとをなうぐ。一にてをあらんちぐい
へぐ。一乗の法ちうと。人こわちふ事のすぢちめ
う。業かみたまはすうゐれバ。九品蓮臺の中にハ下
品といふとを。やかきてまゐうせゐれバ。むげふ
おもしくんぐにくう。いわうう。いひそめつる

こゝろ、ゆたかにこゝろあらめ。やうのうまれいきば。人ふ
ちうがひておそゝ。ゆたかにそなへのわらきぞかし。第
一の人にまうあ一におもはきんとこゝろ思ふめと。
おのおのこゝろをいかゝをこの。

怨　怨の字音
うへ人　殿上人
ぎゝれ　儀式　儀式を歌
式ゐれてよまんとこゝろをいふ
どゝどゝて　動ゝてゐていも

に云ふ十方佛土中唯有一乘法、
無二亦無三除佛方便說、但
說無上道、

九品蓮臺の中にゝ

朗詠の詞に云ふ九品蓮臺

事に感情の激動するをいふ

本　歌の上の句
庚申　庚申の祭
一乘の法　法華經の方便品

之間經下品應足とある
をひるちり極楽に生
るゝに九品の差別あるゆ
ゑ無量寿經に出づ

○萩の露（同じく）

九月ぞゝ。夜一よふあゝたる雨のけさハ
やゝてあさ日ゑ花やゝふちたるにぜんざい

のきくれぬ。ぶらぶらぬきかけまする。いとをのずいごのいたらんすもちぶのうへにのいたる蜘蛛の巣もぶらぶらぬきのこりて。ぶらぶらに糸をたえざるまで上。雨もうすたるぶらぶらさるをつゝぬきたるやうなるこゝろいみじゝあはきはをかしくれぬ。日たけぬまゝ。萩ちるぶのいとおもげもなくなりぬ。枝のうちうごきて人を手ふれぬふとかくぶまゝあぶのたるいみじゝいやをのぶいひるぶを人のこゝろにハ法師をのかゝぶとおもふこゝろ又をうゝられ。

すいぶい　遠垣

らんすもち　落の種類

○むぶ月十日（同じゝ）

むぶ月十日ぶいとくらくぶ。雲もあつく見えれぶらぶらぶの上日をいやけざやうに照りたるにえせもぶ家のうしろぶぶらぶけるぶいふもの

の。土もうるはしうなほるうぬふ。桃の木をのぐ
ちてふわ〳〵ちもとぐちにさいでる。のたれう
ゑをのをくゝまかく枝をちくつやゝかふく。藤
枯のやゝに見えたるにほうやのれる童のかゝ
ぎぬをうけやうれぐして。髪ハうるはしきぐの
ぼりたまぐぶまる紅梅のちぬ白きれぐひきをこ
へゐるをたくぐ。はるくをはきたる。おのもやゝよ
ゐもてわきまよれれ本ちていでなぐちふよま
さ髪をかゝげちるうちはぐのあこめどゐはと
ろひがちふく。袴ハちへゐれぐ色ちぐとよれ。ち

著たる三四人。うづちの本れよのうんきうてれ
ろせぐゝてめんぐたなぐいひて。おうゝゐれぐぱ
しまうひとうわきわれよおほくちぐいふこう
をかゝれ。黒きはるのま著たるものこはまき
てをふに待てちぐをいへば。本れもとにうてひ
きゆるぐひよ。あやふぐうて。袴のやうにのいつ
きてをうもをの。袴ちぐのちうたるをうと片
やうにぐ有ろう。

さいぐに　用法は注者にべー

えせもの　下賤のもの

ひさはこへ　ひさ重ねの意なるべし

はくくわ　半靴

○今まゐりの頃（同じく）

宮にはじめてまゐりたるころ。ぬれたづのつき事のびたるべし。ぞうりみぢかおちぬべくなれば。よるまゐりて三尺の法花帳のうしろにさぶらふ。面ぞうりいで見せさせ給ふだぶ手もえさし出づまじうなりぬれば。とあり。ゐきハかるまなぶのたまハりふ。ゆのつきにまゐりたるおりふしあぶらちるれば。数のすだれどもゆ〜しるるうちハ顕證よ見えて。ぞゆゐまぐわんじて見たるぶりぶりをつめたきいろちるれば。ちいでちせ給へる法手ぞうり見ゆるぶ。ふみだうにほひたるぶりに紅梅ちるかぎりなくめでる。と見たるぬさとびぢちにちふぶをぶる人こそ。ふおはまれとだぶりるまでぞまゐりまゐる。あかつきにそくちぶいそがるに。葛城の神をぶ。ちぶをおかせらる

るをいうでひぢうしてもちらんぜんどてふ
ゐれバ。ほ格ゐもまゐねゐば。女房まゐねゐてされを
ちゐせ給へゐをいゐを。女房きゐてちれつを。待て
なゐをちゐせちゐをバ。わゐひてゐうゐぬ。ねちゐで
問ちせ給ひのゐはハるに。久ゐちゐぬをバた
ゐまはゐちゐぬん。ちをはやとてゐきゐを
ちくゐ作せちゐ。ゐるざゐうへるやおゐれとあ
けちゐしたゐふ。雪いとをかしゐふハひゐけゐ
たまゐれ。雪ふくゐてゐゐはふもあゐまゐれ
ごゐびくめせゐ。ゐれつゐ。あゐゐもさのゐ

やさゐもゐるゐまゐゐんとゐるいとあへれきま
でちまへゆゐきれゐをおゐぼゐめゐやゐさゐ
あゐめ。思ゐふたゐゐをふくれねゐこ。只ゐそが
ゐにいそがせそ。我ゐもなゐぬゐちゐきバま
ゐゐをいやそくゐれ。火ゐれ屋のゐゐ降ゐ
ゐたゐも。めゐばゐうをゐ。ちまゐちゐくゐ。
きいのきびつの火さちゐくおちゐて。それよハ
わゐを人をゐび。宮ハ。沈の中火桶の梨亜ちゐる
にむゐひておはまん。上鶴中まゐちゐひちゐよ
ひゐるまゐにちゐくちゐ。ゐつゐれ間にちゐの

ひびつにまなくゐたる人々。からぎぬ着垂れた
るほど。なれやすらかなるを見るもいとうらやまし
く。御ふみとりつぎ。たちゐ。ゆきちがふさまなどのつ
つましげならず。物いひゑわらふ。いつの世にか
さやうにまじらひならんと。思ふさへつ
ゝましき。おくよりて三四人つどひて。繪など見
るもあめり。しばしありて。さきたかうおふこゑ
すれば。殿まゐらせ給ふなりとて。ちりたる物ど
も取りやりなどするに。おくにひきいりて。さすが
にゆかしきなめりと。御几帳のほころびより

はつかに見いれたり。大納言殿のまゐらせ給へ
るなりけり。御なほし。さしぬきの紫の色。雪にはえて
をかし。柱もとにゐ給ひて。きのふけふ物いみ
にて侍れど。雪のいたくふりて侍ればおぼつかな
さに。などのたまふ。道もなしと思ひけるに。い
かでかとぞ御いらへある。うちわらひ給ひて。
あはれともや御らんずるとて。などのたまふ。御
ありさまハこれよりハ何事かまさらん。物が
たりにいみじう口にまかせていひたる事ども。た
がはざめりとおぼゆ。宮ハしろき御ぞどもに。紅

のかゝあや二つ。白きうゝのやとまりたる。はぐしのうゝらせゆまゝちるぞ。ゐたかきゝる我ゝそうゝる事ハ見ゝゝ。現ゆるまぐちゝゝめを夢ゆこいちぞひる。女房と物いひゆぶムきちぐちゝふをいらへいゝゝうもづゝとも思ひゝゝびきこえ返し。そゝぶどもゆどのゝまひかゝるをあゝが一ひ論ぐ。ちぐきゝゝゆゐゝ。めをあやよ。淺まゝきよであいちゝく。おもてぐあゝむや。

中く　今の用法との異同は

葛城の神　役小角鬼神を

使役せゝに葛城の神ハ形見ぐゝゝとて晝の役ハせで夜のゝ出でゝ岩橋ゝゝる役をちゝゝとゝゝ古事あゝ

注意すべし

顯證　わゝハの表記法は

注意すべし

わんどて　二樣の用法あゝ

注意すべし

上鶴　上流の人

○そもそも二（同じく）

ぢゝぐぶ物まゝゝなぶぐちて。淺まゝゝゆをまゝゝゝせ

ぶ。清凡帳のうしろなるを誰ぞと問ひ給ふな
るべし。ちぞとやすにこころいらめたちておはし
るを。外へにやあらんと思ふに。いやちかくみ給
ひて。袖ばかりのたまふ。やぶはゆるぎし時。さき
おきなましひくる事ぞ。たまふるよりも有
すらんぞのこまよ。清凡帳へぶてくよそに見
やるまるだぶちづかつる我。いやあきま
しぶ。むうひきこえたるかちぬ現ともおぼ
えぬ。行幸ちぞ見くるに。車のうしにいさうの見た
こせるまふる。下すぶしひきつくろひずちらげ

もやと扇をちうくちん。猶いかで我心ちぐらとた
ちけちく。いくので立ちぬでふしぶとあせあえて
いみじちる。何ぶをきくのきこえん。うしちらげ
とさくげたる扇をちへとり給へるに。ふうく
ぶ髪のあやしさちへ思ふ。ぶてまくに。
さるけちやつきてくて見ゆらめぶく立ち給
へぶぶれもへぶ。扇を手まちぐらにて。面さる
ぶかきくるぞなぶのあまひてぶみふとたちる
まくばば。袖をれ。あてくうつぶ。ゆる我。の
らぎぬふちちいちぬうつてぶまぶちにちん

の。久しくゐまゐらせをろんちをうくるしとおもふらんと。心得さを給へらるやこれ見給へ。これいまゐがきてるぐこさいえさせ給ふをゝかしと思ふ上。ゐまして見給らんこゝ一給へで。猶ゝへ心のゝもはいまゐ。人をとらへてたて給らぬちをゝ。この草假名のなる草紙をゝ出でゝ給らんず。誰ゞにのあらん。のきに見せさせ給へゝれぞ。学ある人の手ハ見ちゝて給らんと。おゝ一れ事ゞをゝいゝへ給せんとのゐまゐ。とふゝろだふあゝゝ。又されう

ちおはせて。おれゞ直衣の人まゐらせ給ひてゝ。きゝいまゐらゝ。花やださるゞふ事れどうちゝ。ゝめわゝし興ゞ。れも何がゝゞとある事かゝる事れゞ。殿上人のうへなどゝ寸ゞ。猶いとへんげの拙。天人ゞれ。きゝるにゝゝと覚えゝを。ゝゝ。ひちれ日頃すゞれバいかきゝもれきわゞふらゝ有ゝれ。のゝ見る人ゝも。家の内出でゝめけんゝゞふ。ゝゝハ覚えゝめゞ。のゝゝもてゆゝふゝのゝおゝちれぬゞゝ。拙なゞ作せられて。我をゞおゝふゝゞ問ゝせ給

ふぢいろへて。いろにのぼせけいひろふあぶせ
てだいぢん所のうるよもれを高くひろれば。あ
ち心ろ。そらぶをひるちりけりよ〳〵。ていて
らせ給ひぬいうでろそらぶとにるあんよろ
〳〵だふおもいきろえんちすぐれ事かた。鼻ころ
ろそろぶをちろれぢ。おぼゆさてたきろかく
にくれろぢちけろんと。大うろ心ぢきちぢこれ
ぼゆきぶ。わぶちをもちむ。ひぎうへて
あろをぢてにくとおもへぶまぶらひく
ちろれぶ。ともかくもけいいちほさでぬけぬを

ぢわたるもれいちぶ。濃縁ちるうひやに。艶な
る文をもておろ見しば。
いろにていたちまいつちを
そにあぶひの神ちのうせば
ろれんけれいをあにめでたくちを
しくも思ひみぶろよちほよぢの人ぶたづ。
きろのはられ。
うひきちろそれみをめえゆるよ
うれ身れぶをろぢるぢき
猶ろれぢかろけいちほさせ給へ。職の神も

おのづからいかりうせてやすらせてのち
もらたてをしもでてさはるあらけんとい
ごきをの。

さるがふたを　戯れ言
ちちの神　ちきぎんとらいて　呪詛する人ふ使役せられて災
を人ふあたふ外

○蓬の香　（同じく）

五月ごろ山里にあらく。いみじくをの。澤水
もげふるぶいかき青く見えわたるうへをつき
ちく草おひちぶくたるをなぐくいたぶざよ
にゆらぐちさハえなるぶけるみのふのうを
あらねぶ人のあゆむてつけてとぎ里あげる
る。いかをか。左右にある垣の枝ちぶのうを
て。車のやうにいるも。いとだてとらへてちら
んと思ふよ。ふかはづまて過ぬるくちを。
よもぎの車にわらひぶるぶ。輪のまひた

ちゝるにちかゝかゝえある香をゆかしきもの。

かをれる　薫るに同じ

○蟻通（同じく）

蟻通の明神。貫之が馬のわづらひけるに。此明神のやませ給ふとて。歌よみてまつりけんにやめたまひけん。いとをかし。此ありどほしと名をつけたる

心なる。誠にやあらん。むかしおはしましける帝の。只わかき人をのみおぼしめして。四十になりぬるをばうしなはせたまひければ。人の國のとほきにいきかくれなどして。更に都のうちにさる物なかりけるに。中将なりける人の。いみじき時の人にて心なども賢かりけるが。七そぢちかき親ふたりをもたりけるが。かく四十をだに制あるに。ましていとおそろしと。おぢさわぐを。いみじく孝ある人にて。とほき所にハ更にすませず。一日に一度見ではえあるまじとて。みそかによ

るような家のうちに土をうって。其うちに屋をたてゝ。それよりはめいきつゝ見る。おほやけまも人にをうせのくれたるよ。城ちゝせてあるもちぐてゝ。家に入うゐるゝ人をゞちらでもおはせうゝ。ゝてあゝける学ぶ。おやハ上達部ちぐにや有りけん。中将ちぐ子にてもゝうゝんハ。ゝゝ心このゝきく弟に事ちゝたゝれぐ。さの中将ゝのけきぐ。ぢえあゝいゝ賢くゝく。時の人にちぐ人ちゝけゝ。もちゝの帝。弟國のみゝのぐをゝのでゝはゝうて。此國ゝちゝゝんと

て。常にこゝろゝあゝがい事をゝておくゝ弟ひゝゝにつやくゝとまろにうつくゝげふゝげをたるまれ。二人ぐかりあゝる。ゝれが本末いづのたぐゝとしまゝたゝゝ。ゝべてちゝふべちやゝちゝれハ。帝ゝぐゝ。ゝゝづゝひたゝゝ。いとはくておやのちゝゝよゆきてゝゝくくの事ちんあるといへぐ。只ちゝやゝうゝん川にゝちゝるがゝよこさまたちぐいを見んよ。かへゝてゝぐのゝんうゝを未ちゝるゝてゝのはせゝをゝふまゐゝてわまちゝゝぐ屋みゝてゝ。さゝろゝ伝ゝんとて。人ゝ

ぐ〜てなげいきてるよ。ちきにて行くかさて。
ちゐをつけてはうはれバ。まことにされ
ばうまこと二尺ばかりうちるくもちをの同じや
うちるをこれハいづまきのをめとてをきう。又さ
らに人えちゐびれいの中将ゆきてとべば。二つ
をならべて。尾のかてるほそちはえをちよ
せんよ。尾はちうちちんをめかちき。いひられ
ぢやゞてそれを内裏のうちふて作られバ。ま
こゝに一つハうだうのちゞ。一つをうだうのちる
ふ。又ちゐ一つてつうはちらほど久して。

七わざうまかたる玉のゆとほうて左右
に口あきたるゞちひちをまうて。いまた緒と
ほうてたまはるんゆ國にられちゐる事ちうと
てきうたるにいみじうしんあの上手ふようち
らんそふらゆ上達部よりはじめておうとゐる人
ちうびくいふよ。又いきてうられんさいへぞだ
ふちる蟻を二つとうてゆ。ほそれ糸を
つけ。又それよ今少しふきをつけてあれうの
口ふ蜜をぬりて見よ。いひられバ。ちゆーて蟻
をいきうけふに。蜜のうをうゞて。まことにい

ごとくにものあれども、そのくちに出でにけり。さて
そのいと糸のつゝぬゝれるをば、ぬのはすゝけるに
返にたんぬ。ほ日の本ハすゝこかりけりとて。の
ちみちハいらせいやもせずけりけり。これ中將をい
みどれ人におぼめして。何事をしいうちらく
らねをのたまはるべきこと。なほせられれば。さ
らふつゝさ位をもたまはらで。只おいゐる父母
のこのくれうせて位をだにすまれる
事をゆるしせ給へ。とやーにれば。いみじくやん
き事とてゆるされにれば。よろづの人のおや。

されをちゝてよろこびぶらくいみじうけり。中
將ハ大臣までにちせ給ひてちんあるにち
てそれ人の神ふちたるふやあらんこの明神
のもゝへまでたるる人てよるあらはまて
みるまひにる。

ちるわぶるまぐれる玉の緒をぬきて
あらどほ　ともきらびやあらん

とのまひにる人のうるを。

蟻通明神　和泉の國にあり

孝　　呉音にて訓むべし

○秋の田　（同じく）

八月つごもりがたに。太秦にまうでて見れば。穂に出でたる田に人なんどくてきわぐ。いねのるもとけり。引きなびくこのいつのまにとはまさぬ。げにたいたいたるかの賀茂にまうでて見るが。あはれまことにかりにくるれば。さまざまの女もまじらびぐ。男のかたに手にいなをあるのたいねもとりはまたをうちもちてかたちもの何ふうあるんぞをきるたまもやぐふめでもたるにいとせまいしく見ゆるや。いうでは。穂をうくふてちみをるいなをのうり見ゆ。ほうれさまざまれ

太秦　　讀方は注まづ

さなへとりうえ　　古今集の歌に引のこの早苗とり

一くいつのまに稲葉そよぎて秋風のふく

関白　后宮の父　藤原道隆
女院　円融天皇の后宮
みや　作者の仕へまゐる后宮
二條の宮　釈泉寺の僧所

○二條の宮（同じく）

関白殿。二月十日のほどに。法興院の釋泉寺の
いふ法堂にて。一切經供養をさせ給ふ。女院や
の法まゐ。むかはまゐらせたれば。二月ついたち
の日ばかり二條の宮にいらせ給ふ。ゆふけてねぶ
たくちりにけるぞ。何事もみいれぬ。つとめて。日
乃うらうらかたちいでたるほどに。おきてい
ぢ。いとをかしうあたらしげなる。
ゆふたにみるよりはじめてきのふけるちめ
ま。ほとほとしく。猫犬ちるぞいつのほどにや

入りぬらん。とぞきこえし。桜はいと丈ばかりにていみ
じうちちりぬるやうにて。ふりそそぐにあれば。
いとをかしうきたるうれ。梅ばかりはいまだ。今さかり
なめしやうゆるぶつたるめり。すべて
見るにはひちぶをかにおもしろし。いう
にうるさかりけん。雨ふりバとぼそちんか。
水を見るぞくちをしき。小家ちぶいふもの
ちかうけるこころを。今つくりを設けば。
まだちぶのえんどころあるをいまぶる。
ものをまでけぢかくをのしげる。

居ながらせ給へる。まにびのうさもんの所さしぬき。燭の道行に行のこゝでこつぼのう。ただ直行にうちのぞくてゞすりゐる。法師つよう はゞ らゝて。紅梅乃らゝまれらいきたらゝめたる もんつまうえんちゃどおるかぎりきりれだぐ 出てこゝちして。居きぬをもえだ柳紅梅ちゞを あり。法師ゝてゐるせ給ひて。もれちゞもえ 給ふ。法いらゝのあらゝまほゝをを。男人ゝて ゐづのたのぞうせばやと見る。女房ごもを 法らんじわゝて居に。行事をなほゝめた

らんさいらゝめでたき人ゝをちべに見て法らん びらゝそいをうゝ法ゝやまゝ法れ一人ゝ法人 ちゝ やこれ家ゝ法れむめでうゝ。あそれる 里よくうゝてゝて法ぶらいせ給いめ法 てもいれ法れ法仏をびいの上ちゝまうゝく あつまうまゐゝ給へるぞ。いの上にいやゝくも れをゝこせきを給ふ法をゝて日れをうれし させ給ひゝまういんびゝつゝうゝまれざま ゐれらゝれらゝぐ一つたまちぬぞ。何ちゝう うごゝにをゝこうんちるぐの給ふぐをの

大納言伊周

きたぶれ人くわらひぬ。まこと、ぞ。をこがましくてこのくわらひいまいくばかりぱづのぞ。ちぶの殿をいとほどうす。内より使ひ使てて式部丞を
にぐ、ものまうす。使ひ文を大納言殿とうけとりて殿にまうさせ給へば。ひきこもりてぬゆのしき文うれゆゑ作らぬぞあけてこれ作らん。
この御まはりにまぶ。あやしうをぶいためりかくてけちもあるこそあらせもあるべ
とうせ給へしてもひろげさせ給ふやうにもあるべきぞ作給ふ使ひよういちぶぞ。あ

まぶ。うれすみのまうす女房ちとねさいでてこゝの四の使ひ帳のもとにねうう。
あれたまうて裾のもとにもて作らんでたてせ給へひぬるもとる使ひ文作らんず。
使ひ返しを紅梅の紙にうきを張ふぶ使ひぞもなぐ。ほひあるもとかうしたたし
そのうまあるにはやあらんぞぶ
くちをきぞふはいと作らにとて殿乃使ひ
うとうとう裾をいぶ作を張ふぬ作らぞくは
紅梅のほそもとぞたうぞ作のもとぞあしぞ

醉ハ佐まほ〜ゝ仏どげふをいみじ故事の行幸におぐの君ゆゝ佐を殺〜ゝ。大納言殿まもゆ
〜たちぬきんだちるどいみじ〜けさ〜じ殺して。紅梅の佐ぞをれとらじ〜ゝ故殺る
る。これ佐まゝを佐くゝげどもちり。中のひめ君ようもれかきたこえ殺うてう〜なぞきこゝえんにぞよのめる。う〜をわたゝせ殺
〜ゝ佐ゝ仏帳ひちよきて。あゝゝ〜くまるまゝる人〜にたそええ殺ハねぞいぶせもたゝ
ちゝ佐ゝ〜つぐひて。のれ月の佐ゝうぞく扇ち

どれるをいひあはゝをあゝ。又いぶみゝハ
〜てまゝハ何うたゞあゝんにまゝのせてをち
ぞいひて例の君ちぞにくまる。後佐まのシ
づる人をちゝ。かゝるをとにまのシづしバえ
とゞめ佐を殺ゝ〜日ゝにわゝよゝをゝ
たはまんぞきんぶめちるぞおハ佐まぞ。なよ
〜人ゝくちくひハねぞいぶよゝ。ちの佐シつ
うひ日ゝにまゝる。佐前ぞきゝ〜いるを
まゝ佐ゝで。日ちゝにおたゝて佐ぼこわる
うなるだよゝ〜きに。雨のよゝふたる。

つゝめていみじくむとくもなりぬべかりけるものかな。
ちるはてわきまへんこの屋にて心おとりこそしけれと
いふをぞ聞きてぞふるまひはしける。
のゝ市にうたよりぬ。ぢぶらひのもとにもげにもど
きて。あまりに死のもとに上りぬべきようにして。
ひきたるものとりてみるに上にきてぞぐ
うんにとれとふいてぞきられつまぬけすぢな
くぐぐぶじんちるるにだくくとぬる
とりに上にいかをとりてぞいはぐいそれ一ぞ。

うねずゝぐのかいとをもひたりにやもよるの人
ちゝぐいるまゝ屋にかぐかの死ぬにむ人を
あれぞあ。うのめいぐ。わしていぐ
まぐてひきてていぬ。ちゝ屋の門ゐをこの
うちはのもの。蓋とにぬまきまうれつれ
てぐのにくうひちゝはーとぐていぬ。

一切經供養　佛事の名、
讀方上注書ぐー
ちうぐぐ　陰言ふ

同じ
ちきてゝのれん顔
拾遺集の歌に引きゝ

義家にぬきてうるい
ろうれバちをそ、
ゆ一人ぞうしのき
いそぐいはるん　抜
撰集のおふ山ち
ハいそぐいそれんる

砂のをのくろきてら
をうてうげん
うねずみ　女のおそ
素性のおちくるをか
ねぐらめとをいひ侍へ
ゆうとや

○そもそ二（同じく）

うもんばくの先まわりして法のうしまわりとも
男の女官情きよめ土まわりそそ。ぬれぬせ殆
るたに。花のちるれバ。おれ方ちまし。うれ義を
いづちいふらるなる屋せらるなのつれぬ人
あり恋いるちつ。そ。不枝ちぐをはと
しきたやとおうきつれ。ぬ。ぬ。
見つやとおたせるる。先をそ。ぐ。いまぐく
らそよるも見侍ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
るもも侍きバ。花をわるにやわ。ら。ところめ
たきたやし侍ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。

いくでのこらん。後のうくせ殺るちめ
とて。ごらはせ殺べ。いでよもゝ伝ゝ
うぜのして伝ちゝ。ぬ人てをあてふ
さて。くんちゝ。ぬ人てをあてふ
男にうそふれゝつきぬかせらるゝ。
めづゝたてちゝねどいゝぎゝめでた
き。後はけませバ。ねくれの紙顔をかき
ちゝびやちんぜんを。ひきいる。はけし
まんちゝたのれうを。にのてかく
ちぬんませゝぞ。いぎゝゐちゝるまけゝ女房た

ちゝれたゝぎゝけゝるよくれぐらうせ殺べ。
きれぐわまちゝちきゝて。ふひて伝ゝ
めゝつまちゝきけびやのたいふをいをかくれ
つけさせ殺ゝて。ちふひつるちわぐ。よたい
と人いでゝ入つけど。宰相ちゝきれぐ
ちゝんとわゝちゝてゝいゝぐゝわゝを
せ殺ぶぎゝげちるもをを納言ハまゝ風て
れをきゝと。宮のちふ前てゝちゝませ殺
ゝふめでたゝそゝぶをちれかせ伝ちゝ。今
ち山田ちつゝるゝんとゝらずんぜさせ殺ゝ

もいとをかしかりしをいまはつるもなをあるべきかはとて
人のそこなふよりはあるべきにあらずとて
あまのはしたちにかやをかりもとめ
ふきかへさせ給ふ御ぐしにさしあ
てさせ給ふ　ぐしにさしあ
てさせ給ふ　ぐしにさしあ
ごとくにいとやうやうなるなどに
もてぶせたりをいとはやくつかへ
みじうねんごろにせ給ふをきこしめ
して八日の

乃ほどにまのづるを今はとてしたのうちにて
なをとをかせたりいでぬいみじうねんもも
のぐるにてうたるひとつのたゞの心ひとつけ
ものやいとぶいふやのまはきれば秋はまぎ
しく侍まどよりたちんの屋のもちも
しはづるなをきえんきもいでたせ給ひ
しあ車のもぶいもなをまづくのうさわ
ぐるにくるしばたちぶき人ゝをやたちのう
車にのりたまのいとさわがしくまつりあへ
さるべのやうにあるべきまでかへをえん

ぐるまぐちばきぐるまにて車ちかくえまね
らびたるものづくりたるくんつくてゐま
ちせてんちぐわしひわしひて立てるおよう。
おしうてまぐひのはて出でぐからう
といつたにまぐさいたるいくれバ出づる
よりきてゐれくらおはくと向ひきて。
いやおやしうりけるたくこれ今ハこれのうぬ
らんくくうちもひつまぐいたなどてのくておらく
きちを引てる今ハ得選をのせんと立たくふめづ
らくのちくやなぐわらきてよせくんきぐ。ち

たちまづそのたくうくだりわくつくん人をのせ
引ひてつぐくふもいふあちつくてげからく
ぐたくくぎくれくわはくちるぐいへぐ。のくぬ。
くくもつぐまくハまくくたくづ車にあまバせ
もいくくくきを。ぐくひて二條の堀にまゐくつ
きくく。ち樂ちくく入くせ引てくれちくひ
ゐくせ引ひくく。ぐちにくぐをもほくれくれぐ。
右京小左近ちぐいふわのた人くまゐる人ぐたに
くれどちくくけく。ちくにちくぐひ。四人ぐち
ふにまゐくつぐくひてちぐふたいくのちくぐわを

おほせられもきゝんぬ。あるかぎりはてゝ
ぞ。からゝゝて見つけられて。かぐやひめをせゝ
にそ。ちるぞうく遅くとてひきわてまわるゝ。それ
ぞいつのまにこのゝそ。年ごろのすましの所きに
おほすまつりたるたとき。いこのきぞ
うゝ何のわそゆづぬぞあるをえばりつるぞ。
をおかせられにぞのくもやねぞもそれ
のゝたるいぞわゝちゝ。さいきての車に付ら
んいをいのぞのとくそまゝ付ん。これをか
をほとえのゝまじく付ゝつるをこゝづがい

とかいづるとゆづゝ付ゝつるちゝぞゝ付ゝつる
事ゝゝわびゝ付ゝつるきとゝゝかいをる
ゝ。行事ゝゝもゝいをあやゝきちゝ。又ちぞこのハ
んちゝぞんもゝゝゝつるまめ。右歩ちぞをい
このちるぞちかせゝゝる。されどいのでそゝ付
ちぞちゝ付ゝんちぞいゝちかゝのみくゝとをく
ゝんときゝゝゆゝきまあゝうてゝのゝきたゝん
もゝのことかゝぞをるゝうそ。宮めゝゝんきまのや
んぞとちゝゝんゝそどよかゝめとをもゝゝげよをか
ゝめゝゝゝ。ちゝ付ゝゝほどの待ちぞほよゝるし

きにようてたゆたゆとぞやすらはん。

ふりにふるちるをもつき　拾遺集の詞に司ざなやゆめのゆめにもおもはんもいとゞふるにそふれ

今ハ山田もつくるらん　貫之集の詞に山田さいまをつくるをちるをのかぐらハゆたにもをぞちん

花の色ひらけるを　秋　古詩

をまぐるく　の句をひけるちらんちぐかちるらん

得選　いやしき女官の名

○うちとくまぢきもの（同じく）

あ〻さ人にいはるゝ人さるをゝ小さきたるよ

ア〻をゝらゝれるぞこゝゆゝる。　舟乃うゝ。　日のゝ

らゝこのたゝに海ゝおもゝものいゝぶゝのぞこゝ。

あさみどりのゝちゝるをひきわゝるゝやゝ

にゝゝゝて。いゝかちゝゝきけゝきちゝた。ゝ

うき女の袖だゝうゝきゝる。さゞムゝのもゝゝゝの和

うなる。もろもろのいろをいろどれて。ふをいこ
ぐ〳〵ふる。ふねをのぼらせんごとれき
人をもてせまる。まほろびいたぬいこと
うふれ。海のおもてのあぐまあれるよ。
もをもおぐえば。ちまるべもたまにうぎいくるほ
ど。舟に波のうけあるはまれどそ。さばうれど
かつる海ともえんびの。おもてで。舟にのう
てあくくぐりゆもれもてうちるけきよ
ろしれ海さにてぐたぱ。ちうかちもれよのう
てぐぐゆくぐれもれるぐあるぬやまてそ

うひもちびて千尋ちるぐもあんにもれいとつこ
入れれば水ぎはたぐ一尺ばうだよちるよげに
ぐもれいさかおそろしもひたびばり
あるきつゆあくもせばちばこやせんとれもよ。
大いちる松のおちぐれこ三尺ばうまてまちる
ちをおつぐうくとちげ入きちるぐをけこと
そいみぐれ。蛍形といふもてうれはれ。
されぐれくちるいさかあれ。ばて
もそるもれぐもちう同くちうちけきそ
や結つけてのぐうにすげるものよわけ

さよ。ゆえちゃで何ふうもちゃん。ふとれもちゃん
をそれゆにふみどうふとくなどもあべこのそ
またうもきよげよ。帽額のすれ新。つまがしあ
げかぶってちまどひとうもげよなかをも
あねで。ゆぐゆのちひさもてあ。こやや舟こ
やこそいみどくれ。遠きはまこやる毎の巣を
てうてちち散うたるやにでいとよく似こ
る。ごまうたう而にて。舟がとにちやもたるを
うこうゆば舟やてうていこうちひさた
よのうておきあうく。つやめてちがいをあうを

ちう。おとの白波をまうやにうて消えもてゆけ。
ようき人をのうてあくまがたるやこうなな
ふちぼゆまこうち路を又いやれそうし。れど
それをいうたもくつちにつきれバいやうの
もやをおもうて。　海人のうづきしたうハうた
うがちう。腰よつちうさるもれゆえなどいうがせ
んとちゃんをてがたせがたてをあうぬがた
を。ゆをおがうけの心ちがが。ゆハのうておちが
うちうたひて。ばゆく縄を海ようけあうくいと
あやふくうしうがゆくハあうぬにや海くもの

ぼうんとてをさそれ縄をちんひく。どうまぶ
くりいろはまぶきかちちちゃ。舟のちる
をなをこてはれもちるいきちぶいて。まちとて
ゐぶてるる人だるよ居ゐるる。おやしゐ人仕て
ゐぶよひおちく。をちるめをおやよおち
ます。更に人のおもひくぶたるぶちゐぬ
ゐにちるおめき。

おちゐきる波　拾遺集の歌に「問の中を行るた
ちん釣ぶちけちぶゆく舟のおちの去る波

○枕の紙　（同ぶく）

もれくるうちちて。文字をうんびちたる。
筆もつのひそて。いををかきてばや。はさ
うしる。目にゑえぬゐるもををいやをみ
んびぶと見ひて。つをぶちる里居のほがて
うきおつゑんゐるを。おいちくゐのめびんを
きいひんぶちる。つぶたどちるぶもれ

ぞ。よろかくあるうとれるしをと。ゆうう外ゐこそもいでにたれ。支比佐まつて肉もなくぞ乃まう移てしらをぬいそるゆをこのまつ。の佐まつ左を史記といふ文をこのせ移るだなどのあまいせしをを枕ゐこそハ一佐うめとを一ゝうぶ。さいえよりて移ハせあうしをあやしきを古事やちるたやつれせんなるゑのうぶをこのもてちんとせ一にいとをもなぶえぬ事ぞもるかこうるや。大うこそれハ芸の分てをこのきこうゆを。人のめでたしちぞ見つづき

る。ちるかえいでゐ。おなぶをも本卅島出をもいいぶたくぶこそ。たもふほぶようハわう。ゆうえちうとをちきあ。あぶゆひそうにおのづうもをたハぶきて見てみれぶ。もたにあちまぶ。人ふみくるぞも耳をもきくぶれもうハ。ゆ見ひよ。ぶうきちぶを見くる人をのうまゆちるれバ。いとあやしくぶあるや。ぶふそれもいとわう。人のたくもをもよしといひ。ゆむるをもあしごいふを。ゆのふぶをうわうきるれ。あぶ人よ見

えんぞねるるを。

古文讀本 四の巻 終

明治三十二年五月二十日印刷
明治三十二年五月廿四日發行

四巻 定價金廿五錢

選者 大和田建樹

發行兼印刷者 大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

版權所有